

Newsletter

FEB. 1997

第二次梅里雪山学術登山隊が、一九九一年一月に消息を断つてから五年が経過した昨年の秋、わたくしたちは、梅里雪山へ再々度、学術登山隊を送り出した。この歳月は、帰らぬ人となった隊員の冥福を祈り、またその仲間や後輩の諸君が、気持の整理をして、登頂の是非を検討し、遠征計画を練るために充分であつたかどうか、問題はあらかもしれない。しかし、わたくしは梅里に是非行きたいからと、新たに山岳会に加入したメンバーを含む、意欲的な會員諸君の志をうけて、遠征隊の実現に努力することを心に決めた。総会ではすでに一九九四年に基本的に合意をいただいていたが、その後、阪神大震災があり、また雲南の地元的感情なども考慮して、ようやく現地との交渉が具体化したのは、一九九六年二月であつた。交渉の経過については、予定されている報告書をお待ちいただきたい。

梅里雪山を あとに

高村奉樹

同年十月、ついに念願の梅里に遠征隊を送り出すことができたのは、會員の皆様、まことに暖かいご支援のおかげである。とくに今回は、公的にははじめて會員の皆様、遠征支援をお願いしたところ、実に多くの有志から、多額の寄付をいただいた。また、社会的に募金や寄付をお願いするため、近藤良夫先生を会長とする、後援会をつくるにあたり、會員のかたがたにそのメンバーを引き受けていただいた。この機会にすべての皆様に心からお礼を申しあげる。

遠征隊は梅里雪山を踏まれざる山として残したまま、雲南をあとにした。斎藤総隊長の全体報告、人見登山隊長の今回の登山の反省からその理由を理解いただければ幸いです。

最後に本遠征隊に献身的なご支援を頂いた木村雅昭ヒマラヤ委員会委員長、新井浩事務局長に深甚なる謝意を表する。

梅里雪山

学術登山隊

報告とお礼

斎藤惇生

日中友好梅里雪山合同学術登山隊96は、AAK會員の大きな期待と物心両面の暖かい援助と協力のもとに、十月十七日には先発隊の三名、十一月五日には本隊の八名が関空から出発した。本隊がBCに入つた十一月十六日には、十一月一日より続く好天下に先発隊は奮闘して、第一の難関BC1-C1-C2間のルート作業を完了していた。その後も先発、本隊の隊員に加えて、中国隊の若手二人、シエルバ四人のたのしいサポートを得て、珍しく続く好天に計画は順調に進んだ。第二の難場の急峻な第二バットレスも十一月二十九日には五六七〇メートルにC3設営成功、その上方の三段になった氷壁を突破して、十二月二日には頂上稜線に到達した。あと稜線上にC4を作り、三日もあれば登頂可能と考えられた。

しかし十二月二日、チベット高原に強い寒気団、ベンガル湾にサイクロンが発生して、これが合うと第二次隊の遭難の時の大雪、95年にネパールで大量遭難を起こした大雪に匹敵する降雪があるかもしれないという気象予報が入つた。BCでも天候悪化の前兆である高層雲の巻雲が観測され、ノアによる気象図でも同様なことが予想された。C2、C1も決して安全といえず、

やむなく全員をBCに撤収させた。

下降時にBC1間の工作開始点より八ピッチ約四〇メートルの懸垂氷河と岩壁に挟まれたルンゼが、連日の好天のために積雪が溶けて不安定なガレ場となり、氷河のセラックの崩壊、岩壁からの落石の類発のため、フィックスロープが八カ所切断、二カ所岩に埋没しているのが確認された。それまでもほとんどの隊員が落石の洗礼を受けていたのだが、これからも唯一のルートであるここを通過して、登山活動が続けることは、あまりにも危険だと判断された。隊員会議で検討を重ね、十二月五日夕刻、まことに残念であったが、涙をのんで撤退を決定した。

明氷氷河原頭の美しい大雪原に眠る、第二次隊の日中双方十七名の隊員の鎮魂を目的とした今回の隊は、安全第一で事故の発生は絶対避けねばならなかった。五、六年に一度はあると現地できいたが、好天続きが裏目で、ルートが悪化し、一触即発の危機をはらんでしまった。

BCはかなり広いU字谷の放牧場の中にあり、周囲は樅の原生林で、森林限界は四二〇メートルに達していた。西を見ると太子雪山の山腹には懸垂氷河が並び、昼となく夜となく崩落の轟音をたてていた。九一年一月の遭難発生するとき、このBCで膝上まで積雪があった。C3は多分二メートル以上の積雪であったと思われる。私たちはこのおだやかで美しいBCを、一切のゴミを処理して元の清浄にもどし、十二月八日に雨崩の村人、ヤク、馬、ロバに隊荷を運んでもらい、離れた。

十日徳欽に帰った。慰霊碑で「雪よ岩よ」を歌って別れを告げた。十一月到着したとき、神々し

い秀麗な全容をすつきり見せていた梅里雪山（カクケボ）は雲に覆われて姿を見せなかった。井上たちが別れを辛がっているとしか見えてならなかった。

この山に88年取り組んで以来の合同の相手である雲南体育運動委員会の隊員たちが、今回も誠実に登攀を支援してくれた。深く感謝したい。未開放区域にあり、現地チベット人が位の高い聖山と尊崇している関係上、外国隊の単独の登山はまず不可能であった。

今回は読売新聞社の後援を受けた。記者四人が派遣され、インマルサットによる日本との即時通信が可能な態勢がとられ、日々の登攀活動が新聞テレビ、インターネットで報道された。心から感謝の言葉を申し上げたい。

梅里雪山はまた未踏の聖山として残ってしまった。北東面からは今回のルート以外見出せない。西面は絶壁となっていて、ルートは無いが、あってもさらに困難と考えられる。BCの三四五メートルから頂上の六七四〇メートルの高度差約三三〇メートルは、高度は低くてもチョモランマ登攀に匹敵する。この間、登攀中は緊張の連続で、気を休める場所がないと隊員たちは言っている。この聖山は天と地と人の運氣がびったり一致したときにしか登れないのではないかと、登攀経過を振り返ってみて感じた。将来いつかある日、日中の旗、AACKの旗がひるがえる夢をみるのは、無駄になるかも知れないが、持ち続けたいと思う。最後に絶大な支援を頂いたAACK会員のみなさんにお礼を申し上げて敗軍の将の報告を終わる。

登山隊行動概要

登攀隊長 人見五郎

一・先発隊

メンバー…日方…人見、中山、小林、

中方…木、袁（以上登攀隊員）、

連絡官、コック、コック補助員

十月十七日 関空発、香港を経て十八日昆明

二十日―二十二日 昆明―大理―中旬―徳欽

二十三日―二十四日 徳欽―西当―雨崩

村民の合意が得られず二十九日まで雨崩

で長期滞在、中方スタッフが徳欽を二往

復し、最後は副隊長、公安が雨崩に来て

説得工作。

三十日 雨崩―BC、一日までBC整備

十一月二日（快晴）BC―氷河末端

三日（快晴）BC―ラツパ口ルート工作

荷揚げ隊は上部のルートが完成するまで

氷河末端をデポ地として往復。

四日（快晴）BC―ラツパ口ルート工作

氷河末端より合計七ピッチを工作し、ラ

ツパ口を抜ける。岩壁側からの落石、

沢芯のガレをさけるため、氷河側にライ

ンをとる。中方隊員より不満が出る。

五日（快晴）BC滞在

六日（快晴）BC―C1手前往復

七日（快晴）BC―C1（四四五〇メー

ル）往復

八日（快晴）BC―C1荷揚げ（全員）

九日（快晴）BC滞在、中方隊員が不満言う。

十日(快晴) C1入り(中山、小林)、BCからデポ地往復(人見)、中方休養、デポ地、C1で盗難にあう(ザイル、テント他)

十一日(快晴) C1より上部ルート工作(中、小)、荷揚げ(木、袁)、BC滞在(人見)、昨日に続き、デポ地でピッケル、アイゼン、ゼルプストを盗まれる。公安に調査依頼。

十二日(快晴) C1とC2ルート工作完了(二十ピッチ)。C2のCOL(五二〇〇メートル)に到達(中、小)、デポ地往復(人、木、袁)。

十三日(晴) C1とC2荷揚げ往復後、BCへ(中、小)、デポ地往復(人、木、袁) BCへ、中山がラップ口を下降中、七三〇PM頃セラック崩壊に巻き込まれかける。

十四日(快晴) 公安と現場捜索(人、中方)、中山、小林BC滞在

先発隊総括

・西当までは順調に進めたが、雨崩で村民の抵抗を受けた。結局当地での受け入れ工作が不十分だったようで、主要には金銭問題でもめていたようである。

・BC到着後、日中は気温が十五度まで上がる快晴が続いた。BC到着時の悪天で降った降雪とデブリで当初ラップ口は五十センチメートル以上の積雪があったが、見る間に融け、徐々に状態が悪くなっていった。ただしC1上部は非常に安定しており、中山、小林が短時間でルートを伸ばすこと

を可能にした。

・中国側隊員二名が先発隊に合流したことで、計画以上の荷揚げ力が確保された。しかしながら、彼らが昆明で受けた指示がBCでの休養であったため、しばしば不満が出、その対応に苦慮せざるを得なかった。

・二日にわたる村民の盗難事件。C1でのテント盗難もさることながら、ピッケル、アイゼン、ゼルプスト、ヘルメットの盗難は、先発隊荷の予備で全部揃わず、氷河上を歩けなくなってしまった。

二、本隊

十一月五日―七日 閑空、北京、昆明

八日 昆明滞在 シェルバ四名昆明着、合流

九日―十一日 昆明、大理、中甸、徳欽

十二日―十三日 徳欽

十四日―十五日 徳欽、西当、雨崩、西当から先行、吉村、高井、シェルバ二名BCへ

十六日 雨崩、BC(本隊)、BC、デポ地往復(先発・先行)

十七日 BC整備

十八日 BC開設式・安全祈願、BC、デポ地往復

昨夜の降雪によりBCで積雪三センチメートル。シェルバの安全祈願の祈り。

十九日 登山活動開始、C1入り(中山、小林、吉村、高井)

本隊到着前にC2までのルートが完成していることから、短期速攻のタクティクスを実施することとする。具体的には、

高所の実績がある吉村、高井が先発隊と先行し、睦好、中村は順化を確実にこなして上部へ上がるというものである。

十二・二〇頃ラップ口で大規模なセラック崩壊、ザイル切断。

二十日 中山、小林、C1とC2入り、シェルバ、BCとC1入り

BCとC1間のルートが良くないので、シェルバから荷揚げはC1に滞在して、C1からの逆ボツカでデポ地を往復したいとの提案。その方が早朝ラップ口を往復でき、同時にそのままC2へ荷揚げが可能となる。以後荷揚げは基本的にこの方法で行う。

C2COLの下りは急で四ピッチ(約二〇〇メートル)はアップザイレンで下降。

二十一日 中山、小林、バットレスルート工作

二十二日 吉村、高井、C2入り(吉村C2入り後、不調を訴えC1へ)

中山、小林、C3ヘルート工作。バットレスのルート工作は、まず取り付きまでの大雪原の通過が思いの他長く、しかもラッセルがあり時間を食う。また取り付きに大きなクレバスがあり、取り付きの状態も嫌らしいのでルート選定にも手間取る。バットレスは全体にかなり急(約四十五度)で、風が強い。当初C3予定地はバットレス中間の緩傾斜の稜線上を考えていたが、キャンプサイトとしては不適で、さらに上部の適地の可能性を探

ることとする。

二十三日 登攀隊員全員・松林、C1以上に上がる。この日以降日本側隊員は十二月三日までBC-C1間のルートを通過していない。

二十四日-二十六日 沈澱…二十三日夕刻より降雪。二十五日夜まで続き、BC、センチメートル、C1、四〇センチメートル、C2、一メートル近い(吹き溜まりも含む)の積雪。

二十七日 活動再開、フィックスザイルの掘り起こし。

二十八日 中山、小林、高井、バットレスルート工作。バットレス取り付きで表層雪崩、三名がフィックスザイルにぶら下がりに止まる。ルート工作は続行。

二十九日 吉村、睦好、小林、バットレスルート工作、C3(五六七〇メートル)到達。シェルパ2名、C2入り(当初計画ではシェルパの活動はC2までの荷揚げだったが、時間短縮、隊員負担軽減のためC3まで荷揚げしてもらったこととする)。バットレス取り付きC3まで二〇ピッチフィックス。

三十日 中山、高井、C3入り

十一月一日 中山、高井、上部氷壁ルート工作。上部氷壁は大きく三段になっており、下の氷壁はほぼ垂直四十メートル。中山が下段、中段を突破する。今後のアタック態勢について検討を開始する。

二日 中山、高井、吉村、小林、頂上稜線

(六二五〇メートル)に到達。

人見、睦好、太子雪山側のコルへ、頂上反対側のルート偵察

C3より合計十六ピッチで主稜線の上部雪田の末端に達する。非常に強風で、ブリザードの中を行動。吉村のザックが吹き飛ばされる。頂上稜線に達したことで、明日アタックの構想を固めるも、十四時すぎ、BCより非常な悪天の予報が入る。西側に雲海があり、また高層雲も発生している。悪天予想を受け入れる。夜の交信で、全員BCに待避することを決定。

三日 全員BCへ待避。

十日ぶりにラップパ口を通過。非常に険悪な状態になっていてを知り、愕然とする。ラップパ口七ピッチの雪がほぼ完全になくなつてガレ場と化しており、アイスフォールの形状も大きく変化している。これまでのザイル切断箇所八ヶ所。岩に埋まっている部分二ヶ所、ザイルの皮膜が喪失している箇所約五メートル。さらにラップパ口上部の非常にしろいルンゼにも雪がなく、そちらからの落石の危険性も非常に高い。今後の活動に非常に不安を感じる。

四日 BCにて休養

夜、隊員会議。隊員からラップパ口の危険性が指摘され、今後ルートとして採用すべきか議論を重ねる。結論はせず、決定を翌日に持ち越す。

五日 隊員会議で登山続行を断念する。

六日-七日 撤収準備

八日 BC-C1雨崩

十四日 昆明、十七日 北京、二十日 関空
(紙数の関係で二部省略した)編集部

撤退の判断に至った 経過といくつかの 問題点について

人見五郎

A. 撤退の判断

一. BC-C1間のルートの悪化

撤退の判断を決定した最大の要因はBC-C1間の落石の危険性である。先発隊が入山した十一月当初、入山前の降雪で、ラップパ口ルートは氷河末端で積雪四十〜五十センチメートル、ラップパ口はデブリで埋められており、ガレ場が露出しているのは一部分のみであった。ルートも比較的良く、ピンもスノーバーでしっかり確保できる状態であった。ただ九十年春の偵察、本隊が採用したルートは一段あがつてから岩壁側にトラバースしていたが、今回はそのトラバースは不可能で氷河側にルートを採用した。

このルートが良かったのはルート工作当初のみで、連日の快晴でしかも日中の気温が十五度になるため融雪が早く、先の降雪から八日間で氷河末

端はほとんど地面が露出してしまった。本隊が入山したときはラップ口のフィックスピッチのうち二ピッチほどがガレ場となりかなり険悪な状態になってきた。日中の落石は間断がないとは言え早朝は落ち着いており、いやらしいと思いつつ行動はできた。十二月三日、BCに待避する際、十日ぶりに通過した際ルートの様相が一変しており、ほぼ七ピッチがガレ場と化しており、氷河の上には不安定な岩が堆積しているだけとなった。またこのガレの供給源であるラップ口上部のルンゼも積雪がなく、数百mにわたってガレ場と化していた。このルンゼは非常にもろく、直接直面していかないが、しばしば砂煙をあげて崩壊しているのを遠望している。

BCに降りてからの隊員会議でこのルートについて議論された。ルートが非常に危険な状態になっていることは隊員間で等しく了解されていたが、落石に当たるか当たらないかは運次第という側面があり、この面から隊員の中でも評価が分かれた。

隊員間での意見も判断は五分五分に別れ、最終的には登攀隊長（人見）が判断することになった。行ったら行けるかもしれないと思いつつ、もし落石事故に遭遇した場合「十分危険を認識していたにも関わらず、危険地帯に突っ込んだ」ことになり、今回の梅里でその賭をおかすことは良くないのではないかと判断した。また隊員の意見が分かっているのを承知で危険地帯に踏み込むこと、さらに行動するとなると一往復とは言え、基本的に日中ネ十四名がこのルートに身をさらすことになり、絶対事故が起きないと言う確信が持てなかつた。

た。

二、他のタクティクスの可能性について

隊員会議でも、先発隊、上部で活動し精神的、肉体的に消耗している隊員を後ろに下げ、消耗していない隊員とシェルパで頂上を狙う案も出されたが、現状でも目一杯のところ、隊の力量を下げて今後活動することは新たな危険をはらむと思われ、積極的に採用しなかつた。他のルートへの転進は現実的に可能なルートはなく、日数的にも不可能だった。

B. いくつかの問題点

一、遭難隊からの心理的プレッシャー

隊員はできるだけ前回遭難隊からのプレッシャーを感じないようにしていたが、良きにつけ悪きにつけ遭難隊のプレッシャーを受けていた。特に絶対に事故れないという観念が強く、安全に対する判断が非常に強く働いた。私の隊員の活用も、若手の教育的配慮よりも実績のある確実な隊員に依存せざるを得なかつた。また悪天にたいして皆が必要以上に心理的プレッシャーを受けており、悪天に捕まる前に早くこの山を落とそうと行動を急いでいた。全体に隊はゆとりを失っていたと言わざるを得ず、結果として隊員は非常に消耗していた。

二、先発隊、本隊のタイムラグ

先発隊は当初予定では雨期の最中にBC入りし、BC整備をしつつ乾期を待つてルート作業をするというものであった。しかしBC到着時に乾期が始まり、先発に中方隊員も得られたので、予想以上の成果が上がってしまった。結果として、

本隊が先発に追いつくのに非常に苦勞しなければならなかつた。本隊の順化を待つて行動することも考えられるが、今の晴天を生かすことを考えるとのんびりやつてられない事情があつた。

三、シェルパの活用について

シェルパの活用は、政治的問題とともに、登山スタイルの問題として計画段階から何度も話し合われた。結論としては、できるだけシェルパに頼らず自分たちで登ることが確認され、日数短縮のためやむを得ない荷揚げとしてC2までの荷揚げでシェルパを使うこととした。雇用契約もC2までの荷揚げで結んだ。実際には、隊員の負担軽減のためC3まで荷揚げを依頼した。本隊到着後、積極的にシェルパを活用すれば結果は変わっていたかもしれないが、BCではその考えはまったくでなかつたし、その必要性も感じなかつた。

梅里雪山

登山の失敗に思う

平井一正

梅里雪山学術登山隊報告会が、一月十五日に京大会館で、午前十時から午後五時まで行われ、隊員および関係者約四十人余が熱心に討議した。スライドによる報告（人見）と気象報告（福崎、森本）があつた。討議の詳細をここに掲載する予定であつたが、個人のメモによる記述では客観的事実がゆがんで取られるおそれがあるとの意見があり、ここでは問題点を拾い出し、個人的な見解で

あるがコメントすることにする。

報告にあるように、隊の先頭は十二月二日には、C4予定地まで足を伸ばし、頂上まで五〇〇メートルの地点まで達していた。あと晴天が二日あれば、隊は完全に成功していたと思われる。ほとんど掌中のものであった勝利を逸した原因として、次のようなファクターが考えられる。

一、悪天の天気予報

十二月二日午後、ベンガル湾に発生したサイクロンが北上し、一昨年ネパールに大雪をふらせたような大雪のおそれありとの緊急予報が、安成（筑波大学）からBCに入った。BCの気象ファックスからもサイクロンが確認された。森本（日本気象協会）はこの予報に対しては懐疑的であったが、実行委員長木村は、情報が多いと現地判断に混乱を招くとして、森本の意見はBCに伝えなかった。現地気象係福岡も大雪の予報を覆すほどの自信はなかった（実際は大雪は降らず、晴れの日が続いた）。人見は、雲海や高層雲などから天気がくずれぬ兆候があったので、大雪を回避するために下におりにことに同意し、全員翌日三日にBCにおりにすることになった。（なぜ天気予報ははずれるかも知れないという疑問がなかったのか、ここにも科学盲信のきらいがある）。ここで頂上への気勢がそがれ、隊は攻めの姿勢から守りの姿勢に変わるのである。

二、BCまで下りたこと

なぜC2またはC1にとまらずに、BCまで下りたのか。上部テントで一日様子をみるなど、柔軟な対応はとれなかったのか。松林はC2で十一月二十四、二十五日の大雪のときにも七〇センチ

つもったので、雪に閉じこめられるというおそれがあったこと、またC1自体も本当に安全かという自信がなかったこと、を判断して決めたと語っている。

隊員のほとんどは、井上隊の雪崩遭難、一昨年のネパールでの雪崩遭難など、大雪に対しては恐怖感を持っていたという。この山のもつ特殊性かもしれないが、この山は何が起こるかわからないという恐怖があり、それが大雪即BCという考えに傾いたと思われる。

このとき、BCへおりたくないという意見は出なかったのか。普通はBCからおりると言っても、上のテントが抵抗するものである。今回そういうやりとりがあったとはきいていない。先発と後発の間隔が開きすぎたため、人見、中山ら先発隊員の精神的、肉体的疲労が大きかったときく。このせいか、二日の交信で、大雪のためにBCにおりるといふことは、ザイルの掘り出しの労力を考えると、登頂を断念しなければならぬと人見、中山が言っていることは、あくなき頂上への執念、しぶとさが感じられない。登頂断念という言葉は、隊の姿勢が前向きなときは出てこないものである。

さらに言うならば、BC-C1間が悪化していることは、現場を見なくても、晴天続きを考えたら容易に想像できたことである。BCに下りることになったときに、まずこの部分の通過が心配ではなかったのか。登り返すことができるかという議論はあったのか。このためにも、いったんC1までとして、下部の様子をみるべきであった。

三、BC-C1間のルートの悪化

C1より上にいた隊員は、BCに下りてははじめ

て、BC-C1間のルートがきわめて悪化していることを知った。落石、セラックの崩壊の危険性と隊員の安全という問題を考えて、中止と決定した。現場を知らないで、軽々しい意見はいいたくないが、本当にどのくらいの頻度で落石やセラックの崩壊が起こるのか、落石の規模はどのくらいかなどを、もつと観察して、時間をかけて結論をだすべきではなかったか。もし登山開始のときに、ルートが、きわめて悪化している今のような状態であったら、そのまま登山を中止しただろうか。

登山中止をきめる会議では賛否両論あったという。登攀に全責任をもつ登攀隊長人見は再開にふみきれなかった。未来は誰も予測できないために、行くか中止かは理屈ではない。自分の運を信じて決める以外にはない。滝谷を登るときと同じである。これに踏み切れるのは、やはり頂上への執念、恐怖のうちかつ強靱な精神力と体力であろう。BCにおりる前の交信から伺えるが、今回中堅幹部にこれらが欠けていたと言わざるを得ない。

危険をさけたいという気持ちにはよくわかるが、登山に危険はつきものであり、これを恐れていては山に登れない。経験を積んだ登山家ともなれば、山の弱点をさがしだしてルートをみつけ、いかに危険をさけて頂上に登るかが必要ではないか。

もちろん、前回の遭難が大きく影響していることは否めない。もしAACK以外の隊なら、ほとんど確実に再挙しているであろう。遭難をひきおこしたAACKだから無理はできなかったということはいえる。それは十分わかっているが、中止決定のあと、シェルパと上の荷物を下ろしに行っ

渡辺一枝著

『チベットを馬で行く』

薬師義美

時どき、書名につられて本を買うことがある。最近も『カラコルム・』というのを手にしてみたら、モンゴルを舞台にしたまったくの小説であった。ヒマラヤとかチベットの文字が並んでいると、すぐに触手がのびてしまう。そしてあとで、

これは、と新刊書を前にして唸ってしまった。標題の『チベット・』もそんな類のものかな、と最初に思った。本の顔ともいえるブック・カバーには、稚拙ともいえる、馬と人の線画。見返しにはチベットの地図があるものの、口絵写真はもとより、本文中にも図版が一枚もない。しかも、最初のページの五行目に川喜多二郎さんが登場する。そうすると、これは食わせ物かな、という思いが脳裏をよぎった。

ところが六ページばかりのプロローグを読んでもみると、これはとんでもない紀行書だと、すぐに認識を改めねばならなかった。著者の渡辺一枝さんにして、野外派(?)作家椎名誠氏の令夫人であり、すでにいくたびもチベットを旅し、聖山カイラスも巡礼、ネパールもムスタンに入っている。私が行きたくても行けない所である。そしてこれは、文字どおり、馬に乗ってチベットを巡った踏査実録であった。

一九九五年四月二十二日、著者はラサから単身

スタート。シガツエを経て、ヤル・ツアンボ沿いにマナサロワール湖に至り、プランを往復。それからカイラスを一周してゲケ王国の遺跡を見、センギ・カンバからチャンタン高原を東に横断する。それからアムド、ナツチュからラサにもどった。

コースを概略すれば、まことに簡単だが、車で走ってもかなりの日数を要しよう。ラサ帰着が九月十八日、全工程約四千キロ。五カ月間におよぶ大騎馬行。もちろんサポートの伴走トラックがついているものの、そのたいへんな旅には、ただただ脱帽である。

車で走っていたら見えないものも、馬だとゆくり観察できる。それが本書の、もつともすぐれた点であるが、日々の日記風の記述は、四六判五五八ページ。ギッシリと文字が詰まっており、四百字詰用紙で千二百枚余。普通の本なら、二二三冊分の分量が押し込まれ、図版がないから、息抜くところがない。乗馬の経験のない私は、半日で尻が痛くなり、読み終えたら、足腰が硬直し、肩もバリバリに凝ってしまった。しかし、そこに自分の軟弱な姿を見いだすと共に、改めて著者の強靱な意志とスタミナに感じるのであった。

本の帯には、「渡辺一枝、おそるべし」とある。自分もまさにその通りだと思うが、四台のカメラを持参しているのだから、それで読者を多少はリラックスさせてほしかった。いや、別に写真集を企画中なのかも……。

文芸春秋社

一九九六年七月刊

二二〇〇円

た高井、中村が、早朝であったが、一回も落石を見なかった、と報告しているのをきくと、どうしても悔いが残る。

以上、登山中止に至る重大な三つのファクターをあげたが、それぞれのファクターは独立であり、このうち、ひとつでも事実と違っていたら、隊は多分成功していたであろう。今回、悪天の予報から、次から次へと決定がすべて裏目に出た。さらに、前回の遭難によるプレッシャーと、登攀隊長のあまりにも慎重な姿勢のために、この裏目をひっくり返すことができなかったといえよう。

岩坪がK12の遭難に関して、次のように言ったことを思い出す。「自分でこうやと思いついてしまったら、高所ではなかなか別の考えが思い浮かばない。後で考えたら、あのときこうしたら良かったと思うことが、その場では頭が凍てついたようになって考えられない」。今回とK12では事情が違うが、それでもそれぞれの決定に対して、別の選択肢が取られなかったことは残念である。

BCまで日本から電話、ファックスが通じたことも、登山隊の判断を狂わせた遠因になっている。自分の判断で登るべき登山行為が、リモートコントロールされてしまったら、登山のもつ面白味もロマンもなくなる。登山隊の行動、交信までむきだしになってしまつては、他を意識して正常な判断を狂わすこともある。

今回の失敗は、登山行為に科学文明が入りすぎた結果と云つても過言ではない。

以上、現場にいない者からのコメントなので、的外れや結果論的なところも多いと思うが、正直な感想をのべた。

AACK人物抄

高橋健治さん

—その3—

斎藤清明

前回(第二号)は、高橋さんのスキーについて紹介し、その著作にもふれた。それに関連し、日本山岳会京都支部(斎藤惇生支部長)の今年の新年会で、ナカニシヤ出版(近ごろ平井一正会員がチヨグリザ、サルトロカニリなどの初登頂を綴った『初登頂』を同社から刊行)の中西健夫社長から、「高橋さんの『アールベルグ・スキー術』を持ってます」と話しかけられた。

初めて聞く題名だったが、後日送っていた本を見ると、同じ高橋さんでも、こちらは東北帝国大学山岳部OB(当時、小樽高商助教授)、高橋次郎氏の著作だった。高橋健治さんの『最新のスキー術』より五年前の一九二九(昭和四)年十二月の発行。そのころ、東北大グループではいち早くアールベルグを導入していたようで、高橋次郎著『アールベルグ・スキー・テクニク』も同山岳部から一九二九(昭和四)年一月発行されている。わずか三十一頁の小冊子だが、これを翌シーズンに一般書としたのが前掲書である。

三高・京大グループ(創設時のAACKも)の当初のスキーは、前に触れたように今西錦司さんが創案したという「インナーリオン」だった。こ

れは他の山岳グループにはない独自のものだったが、高橋健治さんが本場でアールベルグの教祖シユナイダーの教えを受け、一九三二(昭和七)年五月の帰国とともに、転換することになる。既に日本のスキー界では映画や本でアールベルグが最新スキー術として一世を風靡しはじめていたから、AACKは決して最先端を走っていたわけではなかった。しかし、高橋健治さんによって「本物」をいち早く導入したともいえる。

このように、スキーもちろん、パイオニア的な山行、味わい深い単独行、さらにローゼ夫人との民俗採集の旅など、高橋さんのそう長くない四十四年間の生涯は多面的なのだが、植物学・森林生態学の学術論文は別として、一般の著作として残

(ローゼ夫人から)

されているのは、スキー教則本ぐらいいしかなのが残念なことだ。

ただし、今西錦司、西堀栄三郎さんともに「三高山岳部の三羽がらす」と評されただけに、『三高山岳部報告』にはよく執筆している。大学生になっても、卒業後にヨーロッパ留学してから、『三高山岳部報告』によく寄稿している。バックナンバを繰って主なものをひろってみた。

第六号(昭和四(一九二九)年一月一日発行)の「剣岳の東面」は、その冒頭は、「一九二四年三月、西堀、今西、私とが立山スキー登山を終えてから、剣をも登って帰ろうと思って・・・スキーで純白に光る天狗原をトラバースして朝焼に輝く剣を見て、吾々若者は心からの敬虔を彼に与えたのだった。その時から私にとって剣岳は忘れることの出来ない山となり、年と共に、私が剣と共に生活して行く山の日の重なる毎に私が剣の懐に育まれて行くにつれて、山男として生立って行くにつれて、剣はファミリーな気持ちから一層進んで今では私という男が剣の中から生まれ出て、迷々私の剣と叫ぶ様にまでなつて了つた」。

三高山岳部(京大旅行部も含め)の剣岳への情熱をかけた取り組みを長文で記録している。これは剣岳登山の基本的な文献のひとつで、日本登山史上の記録集になっている。

執筆時、高橋さんは京大旅行部で活躍中だった。三高は三年で卒業し、今西・西堀・桑原・四手井ら昭三組と同期だが、京大農学部は病氣静養の時期もあつて五年かかり、卒業は昭和五年(一九三〇)で、この間、剣岳に情熱を傾けたのだった。一九二七年夏のチンネ初登攀は高橋さんをトップ

に今西、西堀さんという最強トリオでザイルを組んだ。また、その秋には笹ヶ峰ヒュッテ建設に奔走し竣工させている。

一方、高橋さんの山行を彩るのは単独行である。それを「私の単独行」として、『カットステップ』第3号（一九二九年九月）に、「単独行に関してわが国で書かれたものはほとんどない」と、大島亮吉の文章を題材に綴っている。さらに、同四号

台湾玉山 (3952m)

新井 浩

一・登山手続き

①高山地帯に出入りする場合、台湾省警務処の入山許可書を入力する必要がある。

山行計画書、隊員名簿、パスポート（写し）。
② 中華民国山岳協会（中山協）がこの手続きを代行する。条件として、一隊は、四人以上十一人までとし、高山嚮導員（ガイド）を付ければならぬ。ガイドは無報酬、実費負担。

入山手数料は一人当たり一万元（約四千元）。
③ 人数、予定が決まればガイドを決めてくれる。ガイドが車、山小屋の手配をしてくれる。出発日は、検問所が（土、日）が休みのため、

（月、金）の出発としたい。

（秋山・スキー準備号） 同年十一月に後編を載せている。その結びは、「私は山に於て私の芸術を見出し終に山は神ともなり山は私の凡てとなる。何故私は山へ登るのか、私の芸術のために、山での創作のために私は山に向ふ。と why に対する答へはすこぶる簡単である。お私の単独行は私の創作デザインの一行為である。（昭和）四年）・九・八 笹ヶ峰ヒュッテにて」（続く）

④ 民宿、山小屋には寝具あり。但し、山小屋の排雲山荘（六十名定員、石造り）は、自炊となる。ガスボンベは台北市の運動具店で入手できる。立派な地図も同様。

二・パーティの成立

かなり早くから、玉山登山の企画を親しい仲間におつつけ、勧誘に努めた。うまく定員十一名が集まった。折からの、日本山岳会京都支部十周年記念山行行事の一つに加えてもらった。AACK 会員は井上 潤、高村奉樹、新井 浩の三人であった。

台北市の娘を中山協に行かせたが、早い返事が得られなく、いらつく日が続いた。が、幸いにも有力者の紹介で、ガイドの知己を得て、②の中山協をとばして、直接①の手続きで入山した。入山料は一人当たり五十元（約二百元）であった。後で中山協の理事長に睨まれた。とにかく、格安の手作りツアーのノウハウが分かった。お問い合わせ戴ければ伝授致します。

三・登山日程

4/28 晴、関空→台北。

4/29 晴、ホテルからマイクロバスで出発。

ハイウェイを台中で下りる。水里玉山線を南へ、山岳道路を登る。登山口近くの「塔塔加遊客中心」という山岳資料館に寄る。ここから見た玉山の容姿はゴツゴツの岩山で立派なもの。泊まりは自忠の民宿。

二階の窓から夕日に輝く玉山が望まれた。

4/30 晴後曇、バスで自忠→登山口→塔塔加峠（二六八〇メートル）、登山開始。五時間で 排雲山荘（三五二八メートル）に至る。

5/1 小雨後曇後雨後曇、御来光に合わせて三時半出発。小雨の中の登り。二時間で山頂。雨止むも霧で展望なし。戻った小屋で朝食。昨日の道を下る。十三時半峠でバス乗車。東埔温泉入浴。草屯で海鮮料理、登頂祝賀宴。二十三時帰台北。

5/2 晴、台北市観光。

5/3 晴、台北→関空、帰国。

四・国家公園「玉山」について

この山は中高年向きコースである。登山道はしっかり整備されていて、安心かつ楽な登りである。南アに似た風景であった。但し、頂きへの斜面は、富士山九合目のごとし。あいにくの天気であったが、早い梅雨の気配らしく、やはり秋の方が天候は安定しているようだ。

玉山の日本人初登頂者は、陸軍歩兵中尉長野義虎で、一八九六年の秋であった。東部の玉里から玉山、阿里山、西部の嘉義へと横断、徒歩十七日間の旅であった。それから丁度百年めの区切りの登山となり、この偶然を嬉しく、喜んだ。

多田政忠先生を

偲んで

近藤良夫

多田政忠先生が亡くなられた。享年九〇歳。一九九七年一月七日午後四時すぎ、急性呼吸不全のためである。先生のご逝去を悼み、心から哀悼の意を表したい。

多田先生は大正十五年（一九二六年）、第三高等学校理科乙類を卒業された。この年は、自分たちを「昭三組」と呼んでおられた今西、四手井、西堀、桑原諸先輩の翌年に当たる。また多田先生は湯川秀樹先生と同期の卒業で、「昭三組」の人たちから、「多田は湯川よりも物理の成績はよかつたんやで」とよくさかされたものである。その頃、多田先生の活躍は目ざましいものであった。今西編「ヒマラヤへの道」から拾ってみても次の記録がある。

大正十四年（一九二五年）三月、北岳、間の岳、仙丈岳積雪期初登頂（西堀、四手井、桑原、多田、渡辺、田中喜左衛門）

同年五月、剣岳（奥、多田、近藤）

大正十五年（一九二六年）三月、黒部東沢合宿、黒岳、赤牛岳、野口五郎岳、三つ岳、烏帽子岳の積雪期初登頂（西堀、今西、奥、渡辺、酒戸、細野、多田）。

しかしその後には続くAACKの結成（一九三一年）、富士山（同年）、白頭山（一九三四年）などには多田先生の名前は現れない。多田先生が再びわれわれの前に姿を現されるのは、戦後を迎えてからであった。第二次大戦中は海軍技術将校として技術開発に活躍された多田先生は、一九四八年から五十年までの間、第三高等学校の物理の教授として、またその後は京都大学教養部教授として勤務されることとなった。

戦後北大や東北大から京大に戻られた四手井、桑原両教授の力を得て、一九五二年にはAACKが再建され、アンナプルナ遠征に向けての活動が始まった。多田先生はこの遠征のための募金活動にたいへん力を尽くされた。われわれは当時、このような活動は初めてであったから、多くの人たちから教えを受け、失敗から学ぶ以外にはなかった。私は今でも大阪の今橋にある小泉さんの事務所で、多田先生と一緒に打ち合えを重ねていた日のことを鮮やかに思い出す。

一九五九年に工学部に数理工学科が設置され、また一九六一年には共通講座として工業数学が開設されたのを機に、多田先生は工学部に移られた。多田先生と私とはたまたま研究室が隣合っていたので、毎日のようにお目にかかり、親しくさせていただいた。

多田先生は工学部に移られてすぐ、一九六二年に京大山岳部長に就任された。その頃の京 都はチヨゴリサ（一九五八年）、ノシヤツ

ク（一九六〇年）、サルトロカシリ（一九六二年）などのAACKの遠征に加えて、山岳部でもインドラサン（一九六二年）、ガネツシュ（一九六四年）への遠征が続いたヒマラヤブームの最中にあり、山岳部長の職は多忙であった。さらに多田先生はその翌年の一九六三年五月に、推されてAACKのK12（第二候補ガツシヤブルムIII峰）遠征隊の隊長になられたが、同年末にバキスタン政府から不許可の通知が届いて、この計画は幻に終わった。これはかえすがえすも残念なことであった。

多田先生は一九七〇年京都大学を定年退官された。その頃、京都大学は大学紛争で騒然としたるつばの中にあつた。その後、多田先生は京都産業大学に移られ、教育に勤められた。

先生は決して多弁ではないが、適時に的確な発言をされてわれわれ後輩を導いて下さつた。またAACKの総会や一七会にもまめに出席されて雰囲気を楽しまれ、われわれに励みを与えて頂いた。先生も晩年までいろいろの会合に出ることを楽しまれ、また健康法の一つにしておられたように思う。奥様を亡くされてから、ある時、こんなことを言っておられた。「私はこの頃、晩酌は少なめにして、その分だけブランドーの寝酒をたくさん飲むようにしてるんや」と。

今は先生のご冥福を祈るのみである。

合掌。

日本の

三〇〇〇メートル峰

酒井敏明

『日本の山岳標高一覧』（建設省国土地理院一九九一年九月刊行）に「標高二五〇〇メートル以上のすべての山のデータ表」がある。次の表はこのデータ表に手を加え、高度帯別に六区分、北中央、南の日本アルプスの三山域およびその他の四地域に分けて山の数を示した。同書では飛騨山脈および赤石山脈はそれぞれ北部と南部の二区に分けているが、私の表ではスペースの都合で南北二区を合計した。その他には富士、御嶽、八ヶ岳、白山、那須・日光などの各山域を含んでいる。この表で斜線の右に示した数は私が登った山の数を示す。

実は先年日本山岳会京都支部の『支部だより』に「二五〇〇メートル以上の山」を書いたときにこの表のもとになるものを作ったのである。

同書付属資料「山と山名の取扱いについて」がいうように、一つの山の範囲の認定についてはさまざまな困難がつきまとう。あまり統一的な扱いをすることはできず、整合性に欠ける面が残るのはやむを得ない。例えば、穂高では、奥穂高、涸沢岳、北穂高、前穂高、西穂高が個別に記載されていて順位も与えられているのに対して、御嶽山では、主峰剣ヶ峰だけが記され、摩利支天山、継母岳、継子岳は標高、経度、緯度なども記されて

高度帯	山	飛騨山脈	木曾山脈	赤石山脈	その他
3,000m～	21/21	10/10		9/9	2/2
2,900m～	11/11	9/9	1/1	1/1	
2,800m～	32/21	18/16	3/0	8/5	3/0
2,700m～	26/7	10/6	4/0	9/0	3/1
2,600m～	34/14	21/12	2/0	9/2	2/0
2,500m～	27/8	7/7		11/3	9/0
計	151/82	75/58	10/1	47/20	19/3

斜線の右の数字が筆者の登った山の数

いるが、「いわば付属の山」として扱われ、独立した山とは認められていない。

全部で一五一山が標高の順に記載されている。筆頭はもちろん富士山、第二位は北岳であり、富士の頂上火口丘にある白山岳（三七五六メートル）は付属の山なのか順位を與えられていない。しんがりをつとめるのは劔の西方に控える大日岳（二五〇一メートル）である。

『支部だより』では、この一五一山のうち私が登ったのは八〇山であり、全体の五三％に相当するに過ぎないことを書いた。

一〇〇メートルごとの高度帯で分けると、二五

〇〇以上二六〇〇未満で二九・六％、二六〇〇以上で四一・二％、二七〇〇以上で二六・九％というように、高度が劣る山にはあまり敬意を払ってこなかったきらいがある。二八〇〇以上で六五・六％、二九〇〇以上で一〇〇％なのに、三〇〇〇メートルを越える山二座を登り残していることが気になっていた。

その一つ、仙丈ヶ岳は'94年七月に登り、最後に残った乗鞍岳は'96年七月に登ってきた。三〇〇〇メートル峰二十一座を登った順に示す。

北穂高岳	三二〇六メートル	一九五三年七月
奥穂高岳	三一九〇メートル	同
涸沢岳	三一一〇メートル	同
前穂高岳	三〇九〇メートル	同
槍ヶ岳	三二八〇メートル	同
大喰岳	三二〇一メートル	一九五三年十月
中岳	三〇八四メートル	同
南岳	三〇三三メートル	同
塩見岳	三〇四七メートル	一九五四年十一月
農鳥岳	三〇五一メートル	同
間ノ岳	三二八九メートル	同
北岳	三二九二メートル	同
立山	三〇一五メートル	一九五五年八月
富士山	三七七六メートル	一九五七年十一月
聖岳	三〇一三メートル	一九五八年十二月
荒川岳	三〇八三メートル	一九五九年一月
赤石岳	三二二〇メートル	同
東（悪沢）岳	三二四一メートル	同
御嶽山	三〇六七メートル	一九八六年八月
仙丈ヶ岳	三〇三三メートル	一九九四年七月
乗鞍岳	三〇二六メートル	一九九六年七月

学部学生四年間に一三山、卒業後三年間に五山に登ったが、次の御嶽山を訪れるまでに四半世紀以上が経過しているのはなんとしても恥ずかしい。

穂高各峰と槍ヶ岳にはその後幾度も足を運んだが、只一度しか登っていない山も多い。間ノ岳に登ったのはまだ富士山に行く前だったが、こんなに大きな山があるのかとあきれながら登ったことがまだ記憶に鮮烈に残っている。そのあと北岳のくだりで道を見失い、かなりの急斜面の林の中で生まれて初めてのビバークを強いられたが、そのおかげで、のちにいろんな場所でビバークすることになっても比較的余裕をもって対処できるようになった。

仙丈と乗鞍は交通事情が良いので最後にまわしたわけだが、案の定、'96夏の乗鞍岳は畳平の駐車場から約一時間の登りで剣ヶ峰の小祠にたどり着いた。一面のガスで視界は五〇メートル程、眺望はなに一つ効かなかったのが惜しまれる。最後の三〇〇メートル峰として楽しみに取っておいた瞬間だったのだが、山の神様は、「海の日」が国民の祝日になったのに「山の日」が制定されないことに、ご機嫌斜めだったようだ。

会員の訃報

池田孝蔵 法23 '96.12.18
喜多豊治 経15 '96.12.20
多田政忠 理・物理4 '97.1.7 (別掲)
門田 毅 農・林57 '97.1.16
国際協力事業団専門員。
ネパール中部ポカラ近郊で
自動車転落事故により死亡

会員の消息

杉山隆彦 96.12. エチオピア航空
機がハイジャックされて海中に
墜落したとき、九死に一生を得
て奇跡的に生還した。

梅理雪山学術登山隊に対する会員および 関係者個人募金(1996年10月24日以後)

前田栄三	原 剛	西山 孝
戸部隆吉	前田 司	山本良三
中村恒雄	田中二郎	本仁久一郎
沖津文雄	安仁屋政武	左右田健次
森戸隆男	富永真生	(会員外)

累計 会員113名、一般 19名、計131名

会員	5,765,000円
一般	1,230,000円
合計	6,995,000円

編集後記

梅里雪山学術登山隊は残念な結果になりました。なぜ登れなかったのかについては、いろいろと議論のあるところですが、本誌に掲載の記事によってご推察いただければ幸いです。いずれくわしい報告書を出す予定と書いています。

なお次号から編集委員長を平井から酒井に引き継ぎます。この一年、なんとか四回発行できましたのも、会員各位のご援助のおかげと深く感謝申し上げます。また今後とも活発なご意見を寄せて下さいますようお願いも申しあげます。

次号は五月発行の予定です。(平井)

編集委員 平井一正、酒井敏明、薬師義美

発行日 一九九七年二月二十八日

発行所 京都大学学士山岳会

京都大学左京区北白川追分町

京都大学農学部岩坪五郎気付

京都市北区小山西花池町一八

製 作 (株)土倉事務所